

## Part 1

# 名物校長に聞く 情熱教育論

サッカー、野球、新体操等、スポーツ強豪校として全国にその名が知れ渡る青森山田高等学校。青森県本部のクリーン大作戦には第1回目から参加する等、社会貢献活動にも熱心な学校です。

同校の花田惇校長は、子どもたちの幸せを心から願う、愛情深い先生。インタビューでは、名言が続出しました。

花田校長の「教育論」をご紹介します。



## 花は自分で咲く

お陰様で、全国レベルの部活動が多いのですが、試合で勝つことだけが目標ではありません。勝利至上主義はいけないと思いますが、否定はしません。しかし、生徒たちは、その後も長い人生が続くわけですから、最終的には人間形成に最も力を入れています。

昨年、本校に転校してきたフィギュアの本田真凜選手には、「花は自分で咲く」という言葉を贈りました。花の生長には、水をあげたり日光に当ててあげる必要がありますが、「自分で咲こう」とする気持ちが最も大切。「自立」という言葉に言い換えてもいいと思います。どのように行動するのが適切なのか、自分で考えて判断できる人間になれるよう、高校生活で身につけてほしいと考えています。

## 一番になれなくても、一流になれ

中には、試合などで活躍して勘違いする生徒もいます。それを助長しないように、苦言を呈するのでもわれわれ教師の役目です。失敗から学ぶことも、たくさんありますから。「先生、もう聞き飽きたよ」と嫌がられることもあります（笑）。

ちょうど昨日、ソフトバンクの三森大貴選手から「一軍に登録された」とメールをもらいました。サッカーでは、日本代表の柴崎岳選手等、卒業生ともメールのやりとりをしますが、人間的にしっかりと育っていると思います。プロの世界では、周りに立派な方がたくさんいて、そこからも学んでいるのでしょね。

競争社会では、一番になれるのは一握り。2番、3番



になる子もいますので、生徒には、「一番にはなれなくても、一流になれ!」と教えています。「人間力」をしっかりつけて、一流と呼ばれる人になってほしいと思います。

## 教師は情熱を持って

われわれ教師は、「親ではない、兄・姉

ではない、友達ではない、ガキ大将ではない。でも、そのすべてでありたい」と思っています。その気持ちが無ければ、指のすきまからこぼれ落ちていく生徒が出てしまいます。

私の専門は英語なのですが、以前、道徳教育の指導に携わったことがありました。その際、人間の心には弱いところもある、それを育てるには教師の気配り、目配り、心配りが何よりも必要だと痛感しましたので、先生方には、鳥の目、虫の目、魚の目で見るような気持ちで、生徒の実態を把握しなさいと伝えています。

また、何か問題が起こった時に、「生徒が自分の子どもだったらどう対応するのか」。保護者は自分の子どもを守るために、学校にいろいろ意見を言うわけですから、改善できるところは改善しないといけません。「うるさいな」と思うのではなく、「よく耳を傾けなさい、口は一つですが、耳は二つあるんですよ」と（笑）。

「情熱を持って」ともよく言いますね。校長室の入り口に「情熱（パッション）」と書いて貼って、目につくようにしています。不思議とドアの開け閉めをするときの音が、「パッション、パッション」と聞こえるんですよ。校長室には、いつも「パッション」が満ちています。

※花田校長の「情熱教育論」は次号（秋号・No.516）へ続きます。お楽しみに!